慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	プラトン「ユウチフロン」篇
Sub Title	
Author	星野, 重顯
Publisher	三田哲學會
Publication year	1939
Jtitle	哲學 No.20 (1939. 4) ,p.127- 190
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000020-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

プラトン「ユウチフロン」篇

星野重顯

一　「ユウチフロン」篇の眞僞

「ユウチフロン」篇はプラトンの眞作なるか或は僞作なるかは古く爭はれた問題であつた。Ast, Ueberweg, Schaarschmidt 等は此は僞作ならんとの疑を抱いてゐた。近來になつては Natorp[(1)] がプラトンの眞作に疑をもち、Schleiermacher[(2)] 又「ユウチフロン」篇の價値を疑つてゐる。此の論者は「ユウチフロン」の眞作を疑ふ理由を(一)プラトンはおそらもくつと變つて書いたであらう、(二)又他篇との比較が僞作なることを明かにするとの二點をあげてゐる。然し Stallbaum, Hermann, Adam, Lutoslawski, Shory 等は「ユウチフロン」篇をプラトンの眞作と考へた。特に Bonitz[(3)] は Schleiermacher の考へに強く反對して、內容の點から考へて見れば Schleiermacher の考へは間違つてゐる、只その文章の構圖の點に關しては彼の考へに贊成すると言つて「ユウチフロン」篇の眞作な

ることを高調してゐる。この點 Lutoslawski[四] も同じ意見をもつてゐる。

この篇にて話合つてゐる時期はソクラテスへの訴訟が提出された後その公判以前であるがその著作年代については定說がない。プラトンの著作の最初のものとなすものあり「ゴルギアス」「プロトゴラス」以後の作品となすものもある。然し近來の定說としては「ゴルギアス」「プロトゴラス」以前プラトン初期の作品である。

(一) Natorp, platons Ideenlehre. Leipzig 1903. 36. Anm.

(二) Schleiermacher, Platons Werk. Berlin 1818. Bd. I.2. 51. ff

(三) Bonitz, H., Platonische Studien. 3 aufl. Berlin 1886, 277ff.

(四) Lutoslawski W., Platon's Logic. London. 1905. 199—200.

二　對談者

(イ)ソクラテス

此の篇に登場する對話者はソクラテスとユウチフロンの二人である。ソクラテスはユウチフロンよりも年長者である (12A)。ソクラテスの行動と彼の哲學的活動とを規定するものは此の篇では美しくも又簡單に「人なつこさから」(ὑπὸ φιλανθρωπίας. 3D) と言ふ言葉で表されてゐ

る。此篇では彼は「アポロギア」篇に於ける様にデルフォイの神託に頼つては發言してゐない。諧謔的にソクラテスは自分の教育方法を語つてゐる。即ち彼はどんな人にでも自分のもつてゐるものを聽かんと欲する場合には報酬をとらぬのみか、嬉んでそれを傳へるのである(3D)。然しこの様な教授は危險が伴つてゐる「なんとなればアテナイの人々は」とソクラテスは言ふ「凡々ならぬ智識はもつてゐるが、然し自分のこの智識を他人に教へない人なんかは問題にしないが然しその人が一旦他人に自分の智識を教へるに至るや君の言ふ様に、嫉妬からか或は他の何等かの理由からか彼等は怒るんだから」。(3C)

11B に於てソクラテスはダイダルスに譬へられてゐる。ダイダロスは傳說によれば像の眼を開け、胴から腕を分け、脚を離して歩るく様にする優れたる藝術家である。それ故に彼の畫けるものには生命があり、動く様に見える、かくてこの比較でプラトンはソクラテスに彼がアテナイ人の思想に生命と運動とを呈へたと明かに稱讃してゐるのである。他方然しユウチフロンは反つてソクラテスはこれ迄適用してゐた凡ての觀念をひつくり返して、凡てのものを混ぜしめたと非難してゐる。然しソクラテスは斷言する。自分はダイダロスの才能にかてゝ加へてタンタロスの財寶を得ることよりも、確乎たる概念の獲得を擇ぶ(11E)、即ち自分は確乎たる概念を世界の凡ての財寶にまして擇ぶ、と。

ソクラテスの告訴者としては此處ではメレトスのみが語られてゐる(2B)。そして彼の告訴の中心はソクラテスが若者を墮落さすと言ふことである(3A)。[二] ソクラテスはメレトスに皮肉な稱讃を送つて、メレトスは才子でなければならぬ、そして未來の大政治家である、なんとなれば彼は若者の教育に注意し、若者を墮落さすものを驅逐しようとしてゐるから、と言つてゐる。訴への他の半面はソクラテスが新しい神を創つて、古來の神々を信じないと言ふことである。これはソクラテスのダイモニオン (δαιμόνιον) に關係した訴へである。「アポロギア」に於ては δαιμόνια καινά なる言葉が此處では καινοὺς θεοὺς (3B) となつてゐる。恐らく此の兩語には差異がないのであらう。この樣な誹謗は民衆には易すく信じられるとユウチフロンは考へた(3B)。他に訴への題目がない場合には人々は「アポロギア」に言はれてゐるが如く、凡ての哲學者を彼等は神々を信じないと言ふ手で易すく告訴し得る。[三] ダイモニオンについてのソクラテスの言動はしばらく別として、ソクラテスは人に自分の信仰を疑はしめる機會を何によつて作つたかと言ふに、プラトンはそれについてはつきりと次の樣に言つてゐる、即ちソクラテスは憤怒とか敵意とか爭鬪とかの如き人間の情慾を神々に歸せしめる神話に反對して立つたからであると。彼はゼウスに φίλιος を信じ、又愛の神を信じた (6B. εἰπὲ πρὸς φιλίου)。そして神々の品位を汚す神々の人間化に反對した。メレトスの訴へは此の事に關係してゐることは 6A に明かに言はれて

ゐる。そしてソクラテスは詩人達(Homer und Hesiod)の神の説明と鬪つてゐることも6Bに暗示されてゐる。

この裁判の成行についてはソクラテスはユウチフロンに對して皮肉に「この事がどうなるかは君と言ふ豫言者以外には誰も知りはしまい」と言ひ、ユウチフロンは此れに答へて「ソクラテスよ多分この事件は何んでもないよ。君は君の思ふまゝにこの裁判と鬪つて見るさ。私は私の思ひのまゝにやつて見るよ」と言つてゐる。この一節は此の對話篇が裁判の決定以前に書かれた事を物語つてゐる。そしてユウチフロンの答へからしてプラトンはソクラテスの裁判はあんなに惡い結果にならぬものとの期待をもつてゐた事を知り得る。從つて此の對話篇の會話には凡て「ゴルギアス篇」全體に浸潤してゐる惡意や皮肉の言葉がないのである。

(i) 11E. ἢ πρὸς τῇ Δαιδάλου σοφίᾳ τὰ Ταντάλου χρήματα γενέσθαι.

(ii) 3A. διαφθείρειν τοὺς νέους.

(iii) Apologie. 22D. τὰ κατὰ πάντων τῶν φιλοσοφούντων πρόχειρα ταῦτα λέγουσιν——θεοὺς μὴ νομίζειν

(ロ)ユウチフロン

ユウチフロンは高慢な、自負心の强い豫言者である。彼は自分は民衆の中でその豫言の故に氣違だと笑はれてゐるが、然し自分はそれには何等氣をとめてゐない。何んとなれば彼等が笑

ふのは嫉妬のためであるからと考へて、自分の豫言は凡て適中してゐると自から言つてゐる。彼は神について智識を凡てもつてゐると考へ、たとへ他人が彼を忌避し、實際に氣違だと言つても自分の行狀は間違ないものと信じてゐる。彼は敬虔についての正しき智識は持ち合さずに、供物や祈禱の如き敬虔の外形のみに執着してゐた。彼は凡てのことを知つてゐるソクラテスに對して尊大な教師の役割を演じてゐるが、然し仔細な研究には携はらうとはしない(13E—14B)。そして彼は自分の弟子ソクラテスをほめて「君は正しい」と言ひ、それにつけ加へて「大體には」と言つてゐる(8E)。又彼は學的な能力もなく、思慮も缺けてゐる、何んとなれば彼は既に凡ての智識をもつてゐると信じてゐるから。そこでソクラテスは彼に「君は智識が豐富なために無精である」と言つて彼に努力する樣に忠告してゐる(ξύντεινε σαυτόν)。彼は眞理には無關心であつて間違つた定義で滿足してゐる。「若し私に基づいた議論なればそれは常に動搖しない」と彼は言ふ。彼が人と爭ふ場合には彼は相手の弱點を見つけ出すことを知つてゐる。「メレトスが私に訴へをしたなれば、私はどこに彼の弱點があるかを發見するだらう。そして法廷では私に關してよりも彼について多く取り扱はれるであらう」と勝ち誇つてゐる(5C)。詩人共が神々について言つてゐる物語りや御伽噺を彼は文字通りに眞だと考へて、ソクラテスを驚かす樣な神々の事柄について彼は語る事が出來ると言ふ。然しソクラテスはそのことは今はやめておこうと

拒絶する(六〇)。人間の道德的行爲に對してこの樣な文字通りの信仰は惡るい影響を及ぼすものなることをプラトンは示してゐる。何んとなればユウチフロンは神々の中で最も善なる、又最も正なるゼウスの神に彼の父を鎖付けにすることが許されてゐるなら、私にも又私の父を訴へることが許されて良い筈だと結論してゐるから。ユウチフロンは智者ではなかつたが正直であつた。彼はソクラテスの性格に公平な態度をとつてゐる。實に此の小對話篇に於てソクラテスが正敎を信ぜるものなることを證明せんとしてユウチフロンをプラトンは借りたのである。なんとなればプラトンはユウチフロンにメレトスは政治家としては出發點が惡かつた「なんとなれば彼が君に害を加へる時には國家を根底から害ふものだと私には全く思へるから」(三)と言はしめてゐるからである。

ユウチフロンは學的な對話は出來ず、敬虔についても何等智識をもつてゐないのであるから、充分なる結果が得られぬのは當然である。從つてソクラテスの智識慾の相手となつて研究を續けるのを避け樣としてゐるので、ソクラテスは「私はそれ(敬虔)を學び知る迄は進んではそれから手を引きはしない」と言ふ(四)。

ユウチフロンは自分の父を殺人の罪名で訴へてゐる。事件の起りを彼は六〇にて物語つてゐる。此の事件の起りの仔細な報告はそれが實際に審理された訴訟事件を取扱つてゐること

を物語つてゐる。近代刑法から見ればユウチフロンの父は過失殺人罪を犯したのであるが、當時のギリシヤ人の解釋からすれば彼は何等罪を犯してゐないのである。何んとなれば彼は殺人犯人を殺したのであるから。これはユウチフロンの父の考へであるばかりでなく、彼の家族一同の考へでもあつた(4D)。そしてユウチフロンは父の過失と言ふ點に何等價値を認めてゐない。それ故に彼はこの出來事を述べるに際して(9A)、父が縛られたものを全く忽にしたこの事柄を全く述べてゐない。この事柄は吾々の感情に非常に奇怪に思はれる。此のギリシヤ全土を風靡してゐた考へに反してユウチフロンが自分の父を訴へたのは言はゞ道德的感情からではなくて、宗教的狂信からなしたのである。なんとなれば彼は殺人犯人との交友によつても汚辱 τὸ μίασμα (4C) を恐れてゐたからである。この樣な宗教的立場を彼は就中妥當なものとせんとした。そしてこれによつて宗教についての自分の最高なる見解を證明せんとしたのである。所がソクラテスはユウチフロンのこの手續を非難した。彼は「そして此の樣な成行で君の言へる樣に勇敢に父と法上の爭をやつてゐるのは君は自分の側で不敬虔な行爲を恐らくやつてゐるのじやないかね」(4E)と言ひ、更に「凡ての神々が此の樣な者の行爲を正しいと必ず考へる確かな證據を私に教へて下されば私は君の智識を大に讃めたゝへよう」(9A)と言ひ、又皮肉に「若し君が敬虔とか不敬虔とについて充分に知つてゐなければ君は如何なる場合にも日傭人の

ために君の老いたる父を殺人罪で告訴することはなく、反つて君は神々を恐れて不正なる行爲をしなかつたであらうし、又人々に恥じなくつてもよかつたのだ」(15D)とまで言つてゐる。

ユウチフロンの父はギリシヤ人の解釋では無罪と見られるからしてWilamowitzが「ゴルギアス」篇480D, 507Dを引用してユウチフロンの行爲を是認する考へは正當とは言へない。(五)「ゴルギアス」篇に於ては實際に犯された犯罪を取扱つてゐる。然るに「ユウチフロン」篇に於てはユウチフロンは犯罪と考へてはゐるが他の凡てのものは犯罪と考へてゐない行爲を取扱つてゐる。ソクラテスが如何に孝順を重要視したかを物語る個所を「プロトゴラス」篇の346ABから借りて見よう。そこではソクラテスはシモニデスの詩を說明して次の如く言つてゐる。「美しくも善き人は屢々自已を强要して、例へば人はよく常規を逸した母とか父とか祖國とか或はそう言う何者かを持つものであるが、かゝるものゝ友となり又稱讚者となる。さて劣つた人々はかゝる者を持つた場合に、言はゞ兩親や祖國の劣惡な點を好んで見且咎めては、之を暴露し又誹謗する。其は彼等の面倒を見なくとも、人々が其事を非難したり、罪しない用心なのである。そこで彼等を彌々咎め立て、敢て已むを得ぬ程度以上に惡意を加へるのである。然るに善き人々は其を隱し立て、譽めることを餘儀なくされる。そして假令彼等が不正な目に遭つて、兩親や祖國に對して怒る場合でも、自から慰めて、和解して、其上にも此自分等に關係淺からぬ者どもを愛し又譽あ

る様に自己を强制するのであると彼(シモニデス)は思つてゐる」。これと同様にソクラテスはエウテフロンの父に對する行動に關して同じ判斷を下して「子が自分の父を殺人のために訴くるのは不敬虔だ」と言つてゐる。既にエウテフロンの口から話をきいた時にソクラテスが叫んだ言葉は *Ἡράκλεις* (4A) であつた。そして智識の餘程進んだ人はこれを是認するかも知れぬが一般には人々は君の行爲を善いものとは考へないと皮肉つてゐる。

(一) 12A· *τρυφᾷς ὑπὸ πλούτου τῆς σοφίας.*

(二) 11D. *ἐμοῦ γε ἕνεκα ἔμενεν ἂν ταῦτα οὕτως.*

(三) 3A. *ἀτεχνῶς γάρ μοι δοκεῖ ἀφ'ἑστίας ἄρχεσθαι κακουργεῖν τὴν πόλιν, ἐπιχειρῶν ἀδικεῖν σέ.*

(四) 15C. *ἐγώ πρὶν ἂν μάθω, ἑκὼν εἶναι οὐκ ἀποδειλιάσω.*

(五) Philologische Untersuchungen I. 219. Anm. Den Anlass zum Euthyphron sehe ich doch wohl richtig in einer allerdings zu übler Kasuistik Anstoss gebenden Stelle des Gorgias (480D. 507D), wo Sokrates noch vorschreibt, man müsse seine Verwandten selber anklagen. Vermütlich ward Platon zu der Korrektur durch Polemik veranlasst.

(六) 4E, *ἀνόσιον γὰρ εἶναι τὸ νῦν πατρὶ φόνον ἐπεξιέναι.*

川　對　話

本篇の中心問題は敬虔の本質規定である。(一) 概念規定の何んたるかを知らなかつたユウチフロンは不手際に「敬虔とは今現に私がしてゐることだ、即ちそれが殺人であれ、聖物竊取であれ、又他の犯行であつても不正をなしたものを、それが父であれ、母であれ、又は愛するものであれ私は訴へる。かゝる場合に訴へないのが不敬虔なのだ。」と答へてゐる。そして彼は自分の行爲をゼウスがその父クロノスに、クロノスがその父ウラノスになした行爲を例として正しいものとしてゐる(5E—6A)。ソクラテスから自分の解答の缺點ある事を教へられ、そして又概念規定は普遍的でなければならず、一二の場合に限定されてはならぬことを示されて、(二) ユウチフロンは高慢に「君が望むなら、ソクラテスよ、私は君にその様に言はう」と言つて、正しき概念規定の最初の試として、彼は「神々の愛する所のものが敬虔であり、神々の愛さぬものが不敬虔だ」(三)と言ふ。ソクラテスは先づ彼の此の普遍的な言ひ表し方を讃めて、次に神々の間には爭ひや敵意があり、そして凡ての神々が同一のものを愛し、同一のものを憎むものでない事を思ひ起させてゐる。その爭が物に關したものなれば吾々は計算し、計量して速かに爭を決定するのであるが、然しその爭が道德的領域に於ける正、不正、美、醜、善、惡の概念の場合には爭を決定する尺度と言ふものがない、とソクラテスは説明する。こゝでソクラテスが直ちに道德的概念を確立する尺度を否定してゐることは怪しみ得るが、然し彼はこの論斷からユウチフロンに次の如き結論を作らしたのである。

卽ち神々の間の爭は道德的概念についてであり、又從つて凡ての神々が一つのことを正しいと考へるのではなく、又愛しもしない。從つて一つのことが神の愛する（θεοφιλές）ものであり、又他の神の憎む（θεομισές）ものでもあつて、一つことが敬虔でもあり又不敬虔でもある。このソクラテスの議論を納れてユウチフロンは彼の定義を是正して「敬虔とは凡ての神々が愛するものであり、又反對に不敬虔とは凡ての神々が憎むものである」(四)と言ふ。然しこの定義にソクラテスは重大なる反駁をなしてゐる。卽ち θεοφιλές の概念でもつては敬虔の本質（οὐσία）は言はれてゐないで只高々敬虔の性質（πάθος τι）が示されてゐるのみである。なんとなれば敬虔が凡ての神々から愛されるのはそれが敬虔なるがためであつて、神々に愛されるから敬虔なのではない。然るに θεοφιλές は凡ての神々から愛されるから θεοφιλές と言はれてゐるのである。されば敬虔と神々に愛されると言ふこととは異つてゐるのであつて、同一の意味ではあり得ない。ユウチフロンはソクラテスの此の反駁をきいて立腹して、ソクラテスは何にものも許さずに凡てのものを否定し去る、自分はも早言ふべき事をしらないとこぼす。

そこでソクラテスは敬虔の問題に自分が手をつけて、ユウチフロンに助船を出し、敬虔の概念を正義の概念の下に整へ、「敬虔とは神々の世話に關係する正義の部分であり(五)、他の正義の部分は人間の世話に關係したものである」と定義をしてゐる。敬虔が正義の概念に從屬されると、正義

は或る人に歸すべきものをその人に宛ふその德であるとの意味を敬虔も負ふのである。かくて Ev. Mattaei. 20, 21. ἀπόδοτε οὖν τὰ Καίσαρος Καισαρι καὶ τὰ τοῦ θεοῦ τῷ θεῷ. と同じである。而して Ὅροι 篇に於ては εὐσέβεια は δικαιοσύνη περὶ θεοὺς 或は又 δύναμις θεραπευτικὴ θεῶν ἑκούσιος (413A) と定義されてゐる。所が Diogenes Laert. 3, 83 には正義の第三の部分として死者に對する世話をプラトンは考へてゐたことを物語つてゐる。(七)

この定義に於ては然し θεραπεία (世話) なる言葉が曖昧であるとソクラテスは言ふ。何んとなればテラペイヤには上位のものが下位のものに、恰も人が動物に惠むテラペイヤである。これは自分の利益のためにするものであつて、より有用なものに下位のものをするためのものである。テラペイヤを此の意味で神々に對しては使用出來ない。それは奴隷がその主人に對するテラペイヤと解さねばならぬ。そこでテラペイヤは ὑπηρετικὴ 13D. 奉仕) なるより明瞭なる言葉で置き換へられる。かくて更にソクラテスは神々への奉仕とは如何なるものなるかを研究した。なんとなればいづれの奉仕にしても或る何んらかのことを目的としてゐるから、醫師への奉仕は健康への恢復がその目的であり、船大工への奉仕は船を作ることであり、建築士への奉仕は家を建てることであり、そして軍人は戰に勝ち、百姓は土地から食物を獲るが如く、神々は吾々の奉仕によつて吾々に何にか或るものをなすのか (ἀπεργάζονται 13E)。ユウチフロンはソ

クラテスの此の質問に答へる事が出來ず、只神々が吾々になしたことは πολλὰ καὶ καλά だと答へてゐる。此處で吾々はプラトンに於ては καλά は ἀγάθα と同じ意味をもつてゐることを銘記し置くべきである。さてソクラテスは問題を曖昧にすることを許さない。そしてユウチフロンは次の定義を探求し、莊重なる語調で敬虔の祝福と不敬虔の禍害とを述べてゐる。ソクラテスは彼を嗜めて君には余を教へんとする好意がないとこぼす。「なんとなれば問題の核心に達した時に君は問題の方向を轉じて了つたからである。君が私の問に答へてさへ下されば君からして敬虔の本質を既に充分學び得た事であらうに」(14C)。この言葉は、Cicero (Acad. I. 13: Platonis in libris nihil ἐdfirmatur et in utramque partemm ulta disseruntur, de omnibus quaeritur, nihil certi dicitur) の言へるが如く、プラトンは注意深き讀者に敬虔の正しき定義は最後の問に解答することによつて「カリミデス」「ラケス」に於けるが如く、手易く完成されることを暗示してゐる事は明かである。此の點「ユウチフロン篇」にはプラトンの眞の考へを理解すべき間接なる暗示が缺けてゐるとなす Schleiermacher の考へ(八)に反對して Bonitz(九) の Zweimal lässt der Vefaser den Euthyphron einer bestimmt gestellten Frage auf eine dem Leser besonders kenntlich gemachte Weise auswei-chen, gewiss doch zum Zeichen, dass in der durch die Frage eingeschlagenen Richtung der Gedankengang fortgesetzte. の言に讚意を表する。

さて吾々が神々に奉仕すれば神々は吾々に何にを呈へるかとのソクラテスの問に、吾々は次の如くに答へるべきである。若し吾々が神々に奉仕せば神々は吾々に幸福（εὐδαιμονία）を呈へる、と。「ゴルギアス」篇(一〇)では幸福は道德的教育と正義（παιδεία καὶ δικαιοσύνη）に根さすと言ひ、又正しく善良なる人は幸福であり、不正にして惡なる人は不幸である、(τὸν μὲν γὰρ καλὸν κἀγαθὸν ἄνδρα καὶ γυναῖκα εὐδαίμονα εἶναι φημι, τὸν δὲ ἄδικον καὶ πονηρὸν ἄθλιον. 470E.)と言つてゐる。

さてプラトンに於ては καλά と ἀγάθα とは同一の意義をもつてゐることは前述した所であるが、吾々は解決の途を先づ καλά を ἀγάθα に置換へる所に開かねばならぬ。かくて神々の奉仕者としての吾々の創造（ἔργον）は多くの善なることである。カオスの狀態、惡の狀態から善を實現する事が神の主なる目的である。(一一)「チマエオス」篇によれば神の課題は善を此の世界に實現することゝ、この世界を自分と同じ姿にすることである。そして世界の神化は卽ち精神的なるもの、理性にあづかることである。(一二)神にそして似ると言ふ事が一方又人間の仕事でもある。そして如何にして神へ似る事が出來るかは「テアエテトス」篇 176A—C の教へる所である。

神への奉仕と言ふ點についても他篇を通じて考へ見なければならない。この世界に善を實現さすために人は神に奉仕しなければならないと言ふ點は詳しく說明されてゐないが、然し人

が自分の道德的完成を志した場合には出來るだけその人が正しき智識と從つて眞の德に達する樣に助力しなければならないこの事が眞の神への奉仕だとプラトンが考へた事は「アポロギア」篇の敎へる所である。ソクラテスは此の事を自分の神の命じた天職と確く信じて神への奉仕にあることを繰り返して說明してゐる。(一三) 人間吟味によつて、人々に彼等は眞に必要なるものを何も知らないと言ふ所謂無知の知を植付けさせ、人間の眞の幸福には蓄財や名聞や、榮譽は何等役立たずして反つてそれは專ら彼等の魂を出來るだけ善くすることにあることをソクラテスは人々に知らしめた。破產、入牢、流刑、死等は決して惡ではない、なんとなればそれ等は魂に關したことでないから。唯一の大なる惡は、惡をなすことである、なんとなればそれは魂を害うからである。ソクラテスは自分の神への奉仕を、同胞を正しき智識に導き、そして彼等の魂の健全に對する眞面目なる心遣に導かんとする絕間なき努力に見出した。これがプラトンの神への奉仕の眞の意味であつた。

かくて吾々はプラトンが注意深き讀者に託したる敬虔の定義を次の如くに言ふべきである。敬虔とはそれによつて幸福を得んとする神への奉仕に成り立つ正義の部分である、と。(一四) "Ὅροι 篇に於ては εὐδαιμονία を凡ての善なるものゝ精髓たる善であると定義してゐる。(一五) 或は幸福に暮すためにはそれだけにて充分なる力であるとも、又或は道德的完全性とも定義されてゐる。(一六)(一七)

プラトンはかゝる定義に止らずして何故に次の第五の間違える定義に導いたのであるか。それは供物と祈禱とを敬虔の本質と考へるものが當時多かつたが故である。そして此等の考へを是正せんとする意圖をもつてゐたのである。さて第五の定義は敬虔とは供物と祈禱についての確かなる智識である(ἐπιστήμη αἰτήσεως καὶ δόσεως 14C)。此の定義は敬虔を智識となす點「ラケス」「カルミデス」兩篇と一致した考へをもつたもので重要なものである。さて祈禱とは卽ち吾々の欲するものを神々に依賴することであり、供物とは神々に贈物をすることである。さて贈物は神々がそれを欲し、そしてそれによつて吾々が或る利益を受けることであるからして、敬虔とは人間と神々との間の取引(ἐμπορική τις τέχνη 14E)である。ユウチフロンはこれを肯定してゐるが、プラトンは此の定義の下品なる事を說明して、吾々の神々に贈るものは表彰、榮譽、そして神々を嬉ばす或るもの(χάρις)であると說明する。そしてこの χάρις 言葉は再び第二の定義に還れるものであることをソクラテスは明にする(χάρις=κεχαρισμένον=φίλον)。

此の小對話篇の直接の目的は明かに敬虔の概念研究であり、そして敬虔を正義の下に從屬さすことによつて主德目の數から除外せんとするものである。「プロタゴラス」篇 349B にプラトンは五つの主德目をあげて σοφία καὶ σωφροσύνη καὶ ἀνδρεία καὶ δικαιοσύνη καὶ ὁσιότης としてゐる。それ故にプロタゴラス「ゴルギアス」篇は「ユウチフロン」篇よりも以前に書かれたと考へる

のは然し當を得てゐない。敬虔を狹く考へた時にはプラトンはこれを正義に對立せしめてゐるに過ぎない。「ゴルギアス」篇(二九)では節度ある者(σωφρων)は次の如き言葉をもつて正しく又敬虔であると言つてゐる。「そして節度ある者は又神に對しても人に對してもそれ相當な事を爲すであらう、何んとなれば彼がそれ相當な事を爲さねば節度あるものではないから。更に又人間に對してそれ相當な事をなすことにより正義を行ひ、神に對しては敬虔を行ふのである。しかし正義及び敬虔な行爲をなすものは必然的に正義であり敬虔でなければならぬ」と。此處では正義と敬虔とは近い關係に置かれてゐるが德の二項目となつてゐる。

敬虔の概念の研究が此の篇の直接の目的であるが、他方プラトンは二人の互に對立した人格によつて或る結果を生ぜしめんとしてゐる。ソクラテスは心內に眞の敬虔の念をもち、又宗教の純なる本質をも味得してゐて、自分の生涯を神への奉仕に送つたのである。「アポロギア」篇に於て彼は「私は神への奉仕の事業のために極貧の裡に生活してゐるのである」(二〇)と言つてゐる。然るに彼は不敬虔のかどで訴へられた。他方ユウチフロンは敬虔についての眞なる智識をもたず、宗教については神の品位を汚す樣な考へをもつてゐる。そして自分の父を訴へ、此の世の人々に自分勝手な敬虔や智識を自慢してゐる。プラトンは此の樣なユウチフロンの敬虔の考へこそ本來無神論のかどで訴へらるべきであるとはつきり斷言してゐる。なんとなればプラト

ンは5Cに於てソクラテスをしてユウチフロンに「他のものも、此のメレトスも君を一般に知つてゐないんだ。所が此の男は私をするどくも又、易々と見ぬいて私を不敬虔のかどで訴へたのさ」と言はしめてゐるから。

(一) 5D. τί φῂς εἶναι τὸ ὅσιον καὶ τὸ ἀνόσιον;

(二) 拙稿メノン篇(哲學十七輯)テアイテトス篇(哲學十一輯)參照。

(三) 6E. ἔστι τοίνυν τὸ μὲν τοῖς θεοῖς προσφιλὲς ὅσιον, τὸ δὲ μὴ προσφιλὲς ἀνόσιον.

(四) 9E. τοῦτο εἶναι τὸ ὅσιον ὃ ἂν πάντες οἱ θεοὶ φιλῶσιν, ……

(五) 12E. τὸ περὶ τὴν τῶν θεῶν θεραπείαν.

(六) ἕξις διανεμητικὴ τοῦ καὶ ἀξίαν ἑκάστῳ. Ὅροι. 411 D 此の對話篇は但し僞作との意見が一致してゐる。

(七) τῆς δὲ δικαιοσύνης ἐστὶν εἴδη τρίτα. ἡ μὲν γὰρ αὐτῆς ἐστι περὶ θεούς, ἡ δὲ περὶ ἀνθρώπους, ἡ δὲ περὶ τοὺς ἀποιχομένους. οἱ μὲν γὰρ θύοντες κατὰ νόμους καὶ τῶν ἱερῶν ἐπιμελούμενοι δῆλον ὅτι περὶ θεοὺς εὐσεβοῦσιν. οἱ δὲ δάνεια ἀποδιδόντες καὶ παρακαταθήκας δικαιοπραγοῦσιν περὶ ἀνθρώπους. οἱ δὲ τῶν μνημείων ἐπιμελούμενοι δῆλον ὅτι περὶ τοὺς ἀποιχομένους.

(八) Schleiermacher, Platons Werk. 1. 2, ss. 51.

(九) Bonitz: Platonische Studien. ss. 235.

(一〇) Gorgias 470E.

(一一) Timäus 29E.

(一二) Timäus 30B, 34B.

(一二) Apologie 28E. 30A. *ταῦτα γὰρ κελεύει ὁ θεός.* 23B. *τῷ θεῷ βοηθῶν.* 23B. *διὰ τὴν τοῦ θεοῦ λατρείαν.* 30A. *τὴν ἐμὴν τῷ θεῷ ὑπηρεσίαν*

(一三) Frömmigkeit nichts anderes ist als die vollendete Sittlichkeit, nur unter der Form, dass sich der mensch bewusst ist, hierdurch das dienende Organ für das göttliche Wirken zu sein. (Bonitz: s. 234.)

(一四) *Ὅροι* 412D. *ἀγαθὸν ἐκ πάντων ἀγαθῶν συγκείμενον.*

(一五) ebenda. *δύναμις σὐτάρκης πρὸς τό εὖ ζῆν.*

(一六) ebenda. *τελειότης κατ' ἀρετήν.*

(一七) Reader H., Platons philosophische Entwicklung. Leipzig. 1905. s. 128,—129.
Gomperz, Griechische Denker. I. 289ff.

(一八) Gorgias 507A.

(二〇) Apologie 23C.

四 「エウテフロン」篇のイデア論

「エウテフロン」篇ではその數に制限なき敬虔な行爲 *τὰ ὅσια* (6D. E. 8A. 12E. 14B. 15E.) と敬虔そのもの *τὸ ὅσιον* とを區別してゐる。後者はあらゆる行爲に於て *ἐν πάσῃ πράξει* 常にそれ自身同一であり (*ταὐτὸν αὐτὸ αὐτῷ*) 又常に自から似て居り (*αὐτὸ αὐτῷ ὅμοιον*) そして或る確定

した本質をもつてゐる（ἔχον μίαν τινὰ ἰδέαν）。[1] 然るに敬虔な行爲は、それが敬虔なる行爲であると言ふ點は別として、種々數多くあり得る。多くの異つた性質の敬虔な行爲を敬虔たらしめるものは敬虔そのもの（αὐτὸ τὸ ὅσιον）である。即ち凡ての敬虔のその場の性質とはかけ離れた（χωρίζω）敬虔、換言せば敬虔自體、それ自體に於て（αὐτὸ καθ' αὐτό）ある敬虔である。この敬虔自體によつて凡ての敬虔な行爲が敬虔な行爲となる。[11] さればイデア（τὸ εἶδος, ἡ ἰδέα）は事物の本質（οὐσία）を規定し、事物を眞にそれがある所のもの、又はそれが名付けられてゐるその當のものにする力或は規範である。[三] 「ユウチフロン」篇に就て言へば、敬虔自體が多くの行爲を敬虔な行爲とする力であり、規範であり、原因（αἰτία）である。

本對話篇は前述の如く敬虔の概念を確立することを目的としてゐた。即ちユウチフロンはソクラテスに ὦ πάντα τὰ ὅσιά ἐστιν ならしめる ἐκεῖνο αὐτό τὸ εἶδος を提出しなければならなかつたのである。敬虔の概念は敬虔の αὐτό τὸ εἶδος なのである。從つてイデアは事物の本質を規定する概念ででもある。

本對話篇では εἶδος も ἰδέα も區別なしに使用されてゐるが、[四] もともと此の兩語は姿とか形（型）とかの意味をもつてゐて、ἰδεῖν 或は εἰδέναι（見る）から來たものである。一體ギリシヤ人は造形的（plastische）即ち藝術的な（künstlerische）物の見方をする國民であつて、概念を精神内の姿と解

したのである。木で三角形を作る場合を考へて見るに、此の三角形を作る働はその細工の際に三角形の概念(數學的三角形)を念頭に置いてなされる。プラトンの言葉で言へば概念「三角形」を恰も見本として念頭に置き(παραδείγματα ἐν τῇ φύσει. parm. 132D=staat. 597B, Theaet. 176E)それに合ふ樣に木を細工するのである。それ故に具體的な三角形は數學的三角形によつて三角形となる。同樣に美なるものは「美」によつて美になる。或る繪畫は作者が美のイデアを念頭に置いてそれに相應した形や色を施すことによつて美となる。人間の行爲も又同樣に敬虔な行爲となるのは、その行爲を彼が敬虔の概念卽ちイデアによつて形成するからである。換言せば一つの行爲が敬虔のイデアに導かれるからである。人間の道德的生活に對しても決定するものは概念卽ちイデアである。(五)

イデアは事物の生成、從つてその本質を規定するのであるから事物の本質はそのイデアによつて知られる。三角形の概念(數學的三角形)で吾々はこれが三角形であり、あれは三角形でない事を知る。それ故に概念「敬虔」は尺度、見本、原型(παράδειγμα)である。これによつて吾々は一つの行爲を計り、その行爲が敬虔の概念に合つてゐるか否か、その行爲を敬虔となすべき否かを知る。さればイデアは存在に對しても智識に對しても尺度を呈へるものである。(六)從つてイデアそのものはかゝるものである爲には、あらゆる時を通じあらゆる場合にあらゆる人に普遍に妥

當するものでなければならず只(七)一つの姿(μονοειδής, μία ἰδέα)でなければならず、不死(ἀθάνατος)であり、不滅(ἀδιάλυτος)であり、永劫不變(ἀεί ὡσαύτως κατὰ ταὐτὰ ἔχόντες)でなければならぬ。

本對話篇に於ては最初人間の行爲に對するイデアの意味を問題にしてゐたが、後に此の世界に於ける生成についても一寸觸れてゐる。13E—14Aに於てプラトンは神は善を此の世に實現せんとする。換言せば神は此の世に善のイデアを提出せんとしてゐる。そしてこれが神の完成せんとする ἔργον (14A) であり、神の達せんとする目的であることを物語つてゐる。それ故にイデアは事物の目的原因でもある。(八) かくて吾々はプラトンの世界觀は目的論的なるものなることを知る。

Lutoslawski は「ユウチフロン」篇に於けるイデア、エイドス、パラデイグマの概念は後期の作品に於けるそれ等の概念の持つ意味をもつてゐない(九)と論じてゐるが、吾々は本對話篇 6E の敬虔の概念即ちイデアを敬虔なる行爲の尺度とする考へと「テマヘオス」篇 28A. 28C に於て、神は世界創造に當つて κόσμος νοητός 即ちイデアの世界を念頭に置いて、それを見本として此の世界や事物を作つたとプラトンの言へる考へ方や言ひ表方とを比較して「ユウチフロン」篇に於て既にプラトンは後に完成さるべきイデアの意味を考へてゐたと考へられる。而してイデアの適當なる場所 (τόπος εἰδῶν) は「テマヘオス」篇に於ける神の魂であり、引いて「ピレボス」篇に於ける吾々の理

性であつてそれは物ではなく考へられるものである。(10)

(一) Symposion 211AB. Phaidon 78D, 80B. Staat 527B. Phaidrus 250C—E, 251 A—E.

(二) 6DE. αὐτὸ τὸ εἶδος, ὃ πάντα τὰ ὅσια ὅσιά ἐστιν—μιᾷ ἰδέᾳ τά τε ἀνόσια ἀνόσια εἶναι καὶ τὰ ὅσια ὅσια.

(三) Protagoras 319E. Menon 92A—94E.

(四) 形容詞に中性の冠詞を附してエイドスイデアの意味をもたしたりそれに αὐτό を附して代用する。

(五) Gorgias 497D, E, 498E. Menon 77C. Symposion 211B. Phaidon 100CD, 101A—C. Euthydemus 301A. Lysis. 217B, C, 218C. μετέχειν, παρουσία, κοινωνία 等の言葉が使用される。

(六) Protagoras 319E. menon 92A—94E.

(七) Laches 190E, 191A—D, 198D, 199BC. Menon 71E, 72A—E, 74DE. Euthyphron 5DE, Staat 331C 332D Lutoslawski; p205. Stewart; p28.

(八) Phaidon 74DE, 75A. Phaidrus 250D.

(九) Lutoslawski; p. 199.

(一〇) Staat 507B. τὰς ἰδέας νοεῖσθαι μέν, ὁρᾶσθαι δ' οὔ.

五「ユウチフロン」本文

A　緒論　ソクラテスとユウチフロンの訴訟(二A—五D)一章—五章。

(2) ユウチフロン。君がリュケイオンの常住地を離れて今頃アルコン王の法庭近くの此處にゐ

るのは何にか起きたんですか、ソクラテスよ。まさか君が王の前に私訴を私と同様に起こしたのではないだらう。

ソクラテス。ユウチフロンよ、アテナイ人の言ふ所の私訴では勿論なくて刑事訴訟さ。(一一)

ユ。なんですて、思ふに誰かゞ君を告訴したんですね。君が他人を告訴するなどとは私には實に思へませんからね。

ソ。勿論私が告訴したんではないさ。

ユ。では誰か他のものが君を告訴したんですか。

ソ。實にそうなんだよ。

ユ。誰れなんです、その人は。

ソ。私自身はその人を知らないんだ、ユウチフロンよ。尙かなり若く私に見える、面識のない人さ。その人は然し私の知れる所ではメレトスと言はれてゐる。彼はピトホス區の人だ。若し君が或るメレトス(一二)を記憶してゐるんだつたらあの長い髪の、全く醜い髯の、鉤鼻のあの男だよ。

ユ。思ひ出せないが、然し一體、ソクラテスよ。彼はどんな告訴を君にしたんです。

ソ。どんな告訴かつて君はきくのかい。私は思ふに普通のものじやないね。此の若者がこ

んな事柄を知つてゐるのは意義のないことじやないよ。彼の言ふ所によると此の若者はどうして青年達が墮落され、そして彼等を墮落さすものは誰だかを知つてゐるんだからね。多分そいつは全く賢いんだらう。そして私を馬鹿だと見下して、彼と同じ年頃のものを墮落さすものと考へ、彼は恰も母の許へ訴へに行く樣に國家へ私を訴へ出たのさ。彼は政治的行爲を正しく始めた唯一の人だと私は思ふんだ。(三) 恰も秀れた庭木屋が先づ自然に若木を、そしてその後に他のものに心を注ぐ樣に、若者達が最も善くある樣に先づ心を配ることが正しいこ(3)となのだから。然り而してメレトスは多分、彼の言ふ樣に先づ若者達の芽を害する吾々をなきものにし、而して後に明かに、年寄どもに心を配り、國家に最も多くのそして最も大なる福利を置かんとしてゐる事は此の樣な初めから始めてゐる所から明らかである。

2

ユ。そうあらんことを私は願ふね、ソクラテスよ。然しその反對になるんじやないかと心配するよ。彼が君に害を加へる時には國家を根底から害するものだと私には全く思はれるから。所で君が青年を墮落さすと彼が言ふのは君が何にをすることなんだかきかせ給へ。

ソ。人がそれをきいたら變に思ふよ、友よ。彼は私を新しい神々を創るものだと言ひ、そして私が新しい神を創つて、古來の神を信じないから、彼の言ふごとくんば、まさに此の故に彼は私

を訴へたのさ。

ユ。わかつた。ソクラテスよ、そいつは明かに、君がいつも自分の心の内に生づるあのダイモン(註)について話すからだ。で君を宗教界の革新者として彼はこの様な訴をし、又君を中傷しに法庭にやつて來たのさ、一般民衆は此の様な事柄の中傷には同感し易いことをよく知つてね。何故かと言へば、私が人の寄合の中で神々の事について言つたり、又末來の出來事を彼等に豫言したりする時に多くの人々は私を氣の狂つたものと考へて嘲笑したんだからな。然し私は眞でない事を一つでも彼等に豫言した事はない。然し彼等は此の様な事柄について理解してゐる吾々全部に嫉妬してゐるんだよ。そんなことにくよくよくよせずに、斷乎已の目的に從つて眞直ぐ進むさ。

3

ソ。彼等が嘲笑することなんか何等意味はないさ、親友ユウチフロンよ。思ふに凡々ならぬ智識はもつてゐるが、然し自分のこの智識を他人に教へない人なんかアチナイ人は問題にしないが、然しその人が一旦他人に自分の智識を教へるに至るや、君の言ふ様に、嫉妬からか或は他の何等かの理由からか彼等は怒るんだからね。

ユ。彼等が、さて、此の様な關係で私に反對してゐると言つた様な風で人を試すことは私は全

々望んでゐないよ。

ソ。思ふに君は實に自分の智識を人にめつたに示さなかつたし、又それを敎へようとも欲しなかつた。所が私は自分の人なつこさから支拂を受けることがないばかりか、おまけに誰かゞ私の言ふ所をきこうと欲すれば私は非常に嬉んで長たらしく凡ての人に自分の智識を談ると風聞だけを聞いてゐる人からは思はれてゐないかと恐れてゐる。(五) 若し又私が今しがた言つた樣に彼等が只私を君が君について言つた樣に只嘲笑しようとしてゐるなら法庭で自分の冗談と物笑に時を費すも非常に愉快ならんも、(六) 然し若し彼等が眞面目になしたとすれば、それがどう言ふ結果になるかは君と言ふ豫言者以外には誰も知りはしまい。(七)

ユ。ソクラテスよ、多分此の事件は何んでもないよ。君は君の思ふまゝに此の裁判と鬪つてみるさ、私は私の思ふまゝにやつてみるよ。

4

ソ。ユウチフロンよ、君の裁判はどんな種類のものなのか。君は原告なのか、被告なのか。

ユ。私が訴へたんだよ。

ソ。誰を。

(4) ユ。それをきけば、私は氣狂だと思はれる樣な人を訴へたのさ。

ソ。何んだつて、その被告は逃げ得るのか。

ユ。逃走なんか出來やせんよ。その男は可成年をとつてゐるからね。

ソ。その男つて誰だ。

ユ。私の父だよ。

ソ。エ、、君の、友よ。

ユ。全くそうなんだ。

ソ。で訴の事件は何になのだ、そして罪名はなんだ。

ユ。殺人罪だよ。

ソ。あの殺人罪だつて。ユウチフロンよ、一般民衆は自分の父を訴へると言つた樣な事が正しいと言ふことを知つてゐないのは確しかだぜ。私は思ふに、君の行爲は最善ではないよ。智識の餘程進んだ人には最善かもしれぬがね。

ユ。神かけて、ソクラテスよ。おそらく、ずつと智識の進んだ人には最善だと思ふよ。

ソ。君の父に殺された者は君の親類緣者の誰れかだらうね。そらそうにきまつてゐる。なんとなれば君は、思ふに、他人のために自分の父を殺人罪として告訴する筈がないから。

ユ。ソクラテスよ、殺されたものが他人であるか親類緣者であるかを君が區別しようと考へ

て、殺したものが合法に殺したのか、或は不法に殺したのかを考へてならぬと君が考へるのはおかしいよ。そして合法な場合は問題はないが、若しそれが不法な場合には殺した人が同じ屋根の下にゐる人でも、同じ釜の飯を喰つてゐるものであらうとも吾々は訴へなければならぬ。君が若しかゝるものに共犯だとしても汚辱の點では同一であつて、そして主犯を訴へることによつては自分も又主犯をも淨めるものではない。殺されたものは實は吾々の傭人の一人であつて、ナキソスで耕作してゐた吾が家の日傭人だつた。彼奴は醉つて吾が家の奴隷と喧嘩をし、この者を殺して了つた。そこで父が此の男の手足を縛り穴の中へ閉じ込めて置いて、その間に人をやつて此處まで此の男を如何に處置すべきかをト筮者に問ひに來させた。此の間中父は縛つた奴を一寸とも注意せず全々忘れて了つてゐた。彼奴は人殺であり、よし奴が死んでも全々問題じやないもんだから。しかも實にこの間に彼奴は死んだのだ。即ち彼は飢へと寒さと縛られてゐる苦痛とでト筮へやつた使のものが歸つて來る以前に死んで了つた。そして私が死んだ奴の爲に父を殺人罪で訴へたもんだから、父や他の家のものが怒つてゐる。彼等の言ふ所によると、父は彼を殺したのではないし、又よし彼を殺したことが眞だとしても殺された奴は人を殺した奴なんだから、そんな奴のためを考へる必要はない。そして子供が自分の父を殺人罪で訴へるのは神の意にそむくと。(八)しかし彼等はソクラテスよ、

神の諚が敬虔、不敬虔にどうであるかを誤解してゐるんだよ。(九)

ソ。で君は、ユウチフロンよ、神の諚について、從つて又敬虔、不敬虔がどんなものなのかの確かな智識をもつてゐるんだね。そして此の様な成行で君の言へる様に勇敢に父と法上の爭をやつてゐるのは君は自分の側で不敬虔な行爲を恐らくやつてゐるのじやないかね。

ユ。ソクラテスよ、私が凡て此の様な事を正しく知つてゐなかつたら、私は何んの役にも立たず、又多くの人々からユウチフロンを區別出來ないよ。

(5)

ソ。從つて、優れたるユウチフロンよ、私は君の弟子になり、(一〇)そしてメレトスから訴へられた訴訟に此の様な見地で、俺は以前に神の諚を知らんとして熱心に努力したと言つて、メレトスに挑戰することが私には一番良いことではないかね。そして彼は私が無分別と好奇心から宗教の領域に全く誤を犯してゐると言ふが如くに私は今では君の弟子となつてゐると告げて、そして「メレトスよ、若し君が」と私は續けて言はう。「ユウチフロンが此の様な事柄を知つてゐるし又正しく考へてゐると承認すれば私をも同様に見て、法庭へ引き出さないで呉れ。若しそうでなければ私よりも先づ私の師ユウチフロンを訴へるべきである、彼は私と彼の父の二老人を—私を教育によつて、そして父を警告と處罰とによつて—墮落させてゐるのだから。」

そして彼が私の言ふ所をきかず、訴へを中止せず、私の代りに君を訴へないその時に法庭で彼に挑戰して辯論する以外に最良の法はないのじやないかね。

ユ。まつたく、神かけて、ソクラテスよ、若し彼がかくして訴へを私に對してなせば私はどこに彼の弱點があるかを發見するだらう。そして法庭では私に關してよりも彼について多く取り扱はれるであらう。

ソ。そして親愛なる友よ、私がそれを知り、君の弟子とならんとしたからだよ。私は知つてゐるが他のものも、此のメレトスも君を一般に知つてゐないんだ。所が此の男は私をするどく又易く見ぬいて私を不敬虔のかどで訴へたのさ。さて神かけて一體殺人やその他の場合で敬虔とか不敬虔とかは何か君が今判然と知つてゐると固く主張する所を私に言つて呉れ。敬虔とはあらゆる行爲に於て同一ではないのか、又不敬虔とは全く敬虔に反對で、それ自からは同一のもので、そして不敬虔である限りは凡てのものは同一の本質であるんじやないか。

ユ。確かにそうだよ、ソクラテスよ。

B　論述　敬虔とはなんぞや。

(一)　ユウチフロンの三研究、敬虔とは

a、今彼の現に爲してゐる事

b、神々に愛されること

c、凡ての神々に愛されること、

であると定義する。此等はソクラテスによつて檢討され不可なるものとさる。(五D—十一B)六章—十三章

ソ。では、君は敬虔、不敬虔をどう考へるか言つて呉れないか。

ユ。よし來た、言はう。敬虔とは今現に俺のしてゐることさ、卽ち殺人或は聖物竊取、或は他の此の樣な犯罪を犯した惡行爲者に、それがよし父であれ、母であれ又他の誰であらうとも告訴を提起することさ。そして他方これ等のものに告訴を起さぬことが不敬虔だよ。(二二)でソクラテスよ、私が合法的な行爲がその內に成立する非常に適切な證據を示すから注意し給へ—その證據を私はその內に正しき態度が成り立つことを知らしめる爲に既に他人にあてはめて(6)みたんだが—それは違犯者が誰であらうとも捨てゝ置いてはいかぬと言ふことだ。人々は自からゼウスの神を諸神中での一番良い、一番正しい神と考へてゐる。そして此の神について彼は同意して次の如く言ふ彼は自分の父(クロノス)をその子を何等法上の理由なしに殺したるをもつて縛した。(二三)そして此の者(クルロス)も又自分の父(ウラノス)を同じ理由で害したと。然るに私が惡事をなした父を訴へると私を彼等は非難してゐる。かくて彼等は神について

言ふのと、私について言ふのと矛盾してゐるのだ。(二三)

ソ。ユウチフロンよ、恐らく、神々について人が(その様な事を)言ふ時に、それを私が不滿に考へる、この事が私の訴へられる所以じやないかね。そして思ふに、その故に或る人は私が罪があると考へるのだ。さて若し此の様な事柄について十分な智識をもつてゐる君も又それに同意見だとすると、思ふに、俺はそれを許さねばなるまいと言ふのは、その事については何事も知つてゐないと自認してゐる私が何事も言ふことが出來ぬから。しかし友情があれば、この様な事柄は一體どうなるか君が實際に信ずる所をきかせて呉れ給へ。

ユ。そして、ソクラテスよ、これよりももつと不思議な事がある。それを世間はあまり知つてゐないが。

ソ。君は神々がお互にやる爭や、深い不和や、戰やその他此の様な事柄が、あの詩人によつて物語られ又眞しやかに(二四)畫く畫家によつて神聖な儀式や寺院を飾る爲に書かれ、そしてあのパナテナイの大祭にアクロポリスにもち來られる此の様な繪で一杯になつてゐる禮服(ペプロス)で見る様に、實際にあると思ふかね。これ等の事柄が本當だと吾々は言へたものかね、ユウチフロンよ。

ユ。實に、こうしたもののみでなく、お、ソクラテスよ、又俺が今言つた様に、おのぞみなら、神々についてもつと多くの他の事柄を君に詳しくお話しよう。それを君がきいたら、キツト、驚くぜ。

ソ。私は驚きはせんよ。だが、此の様な出來事は時間のある時に物語りしてもらふとして、今私が尋ねた事を究めて、くはしく説明して呉れ。と言ふのは、ね、友よ、君は先から敬虔とは何んぞやとの私の問に對して充分に教へて呉れないで、只私に今自分がしてゐること、卽ち自分の父を殺人罪で訴へた事が敬虔だと言つてゐるのみだ。

ユ。お、ソクラテスよ、これで私は眞理を物語つてゐるんだぜ。

ソ。多分ね、が然し、ユウチフロンよ。君は他に多くの敬虔な行爲があると言ふんだろう。

ユ。そりや、勿論、あるよ。

ソ。私は君に多くの敬虔な行爲中の一、二について教を乞ふたのではなくして、凡ての敬虔な行爲を敬虔な行爲たらしめるその當のエイドス(一五)そのものを尋ねてゐると言ふ事を思ひ出し給へ。なんとなれば、思ふに、それによつて凡ての不敬虔な行爲が不敬虔な行爲となり、敬虔な行爲が敬虔な行爲となるその唯一のエイドス(一六)を君は言つたんだらう、思ひ出さぬかね。

ユ。確かにそうだ。

ソ。此のエイドスが一體なんであるかを教へてくれれば私はそのエイドスを見つめて、それを見本(パラディグマ)に使つて君や他の者の行動がそのエイドスに相當してゐれば敬虔であると言ひ、相

當してゐないものは敬虔とは言はぬのだ。

ユ。君が望むなら、ソクラテスよ、そう言ふ風に説明しよう。

ソ。勿論、そう私は望んでゐるのだ。

(7) ユ。神々に愛されることが敬虔で、神々に愛されぬことが不敬虔さ。(一七)

ソ。うまい、ユウチフロンよ、君はこうと私が望んでゐた様に答へて呉れた。が然しそれが正しいかどうかと言ふことは僕にはまだわからぬ。然し君は疑もなく君の言つたことが正しいと言ふことを教へ込んで呉れるだらう。

ユ。勿論さ。

ソ。さあ、吾々が今言つたことを檢討して見よう。神の愛すること(テオピレス)、そして神の愛する人(テオピレステントロポス)が敬虔で、他方神の憎むこと(テオミセス)、そして神の憎む人(テオミセーステントロポス)は不敬虔なんだ。敬虔は不敬虔とは同じものでなく、その反對なんだ、そうじやないか。

ユ。實にそうさ。

ソ。そして今言つたことは立派だと思ふかね。

ユ。思ふとも、ソクラテスよ。

ソ。そして神々は仲良くはなく、ユウチフロンよ、互に一致してゐるのではなく、又他に對して

敵意をもつてゐると、こう言はれてはゐないかね。

ユ。そう言はれてゐる。

ソ。この敵意と怒りは、友よ、どの様な不和から生じるのかね。これを次の様に研究しよう。君と私とが數のどちらがより多いかについて意見を異にしたときには、此の意見の相異について吾々の間に敵意が生じ、お互に怒るんじやないか、或は直ぐに計算してこの點では一致しはしないか。

ユ。全くそうだ。

ソ。若し吾々が大小について爭をした時には速かに計量して此の爭を終らしはしないかね。

ユ。そうだ。

ソ。そして輕重については、思ふに、天秤にかけて初めて吾々は決定するんだろう。

ユ。そうなくてどうなるものか。

ソ。ではどう言ふことについて意見を異にし、そして何等の決定に至らずして、互に憎み合ひ、爭ふかね。そいつは君には多分直ぐにはわかるまいから私が言はう。正と不正、美と醜、善と美とを研究する時だ。此等が吾々の意見を異にし、又吾々が充分なる決定を獲る事の出來ぬものであつて、そしてそれが出來ない時に私やら、君やら他の凡の人々を爭はしめるものでは

ないかね。

ユ。勿論この爭はある、ソクラテスよ。そして爭はこの樣な事柄についてだ。

ソ。では神々はどうだ、ユウチフロンよ。神々が何にかについて意見を異にしてゐる時にはこの樣な事柄で意見を異にしてゐるのではないかね。

ユ。全く、そうなくてはならぬ。

ソ。神々の間には、親愛なるユウチフロンよ。君の言ふ所によれば正が種々に考へられてゐるんだね。そして美も醜も善も惡もね。若しも此等について異見がなかつたら、思ふに、お互の間に爭がない筈なんだから、そうじやないか。

ユ。よく言つた。

ソ。各人は美と思ひ、善と思ひ、正と思ふものは愛し、此等と反對のものは惡むのだらう。

ユ。全くそうだ。

ソ。君の言ふ樣に一つのものを一人は正だと考へ、他のものは不正だと考へ、そしてこれについて爭ひ、異見を抱き、そしてお互に鬪ふのだ。そうじやないか。

(8)

ユ。そうだ。

ソ。されば、同じ一つのことが、一般に言はれる樣に神々によつて憎まれもし、愛されもするの

で、神の氣に入ることゝ、神に憎まれることは一つことなんだろう。

ユ。言はれる通りだ。

ソ。それで敬虔な行爲と不敬虔な行爲とはユウチフロンよ、此の說明からして同じものだろう。

ユ。多分ね。

9

ソ。結局君は私の質問に答へなかつたんだ、お優れたる者よ。と言ふのは私は敬虔と不敬虔とが一つものであり得るかと言ふ樣な事はきかなかつたからね。所が神々に愛されることが神々によつて憎まれることである樣に見える。されば、ユウチフロンよ、今君がしてゐることと卽ち父をたしなめることがゼウスの神の氣に入り、他方クロノスの神には氣に入らず、又エパエトスの神に嬉ばれ、他方ヘーレの神には憎まれ、又そのことについて或る神が他の神と意見を異にし、又同じ方法によつて神々に氣に入らうと憎まれようと驚くにはあたらぬ。

ユ。然し、ソクラテスよ、どの神だつて人を不正に殺したものは裁判に廻されねばならぬと言ふ點では意見を異にしないと私は思ふ。

ソ。ではどうだ。ユウチフロンよ、君はいつか他人を不正に殺し、或は他人に害惡をなした者

は裁判に廻されねばならぬと言ふことを此の世の中の誰かゞ疑つたと聞いたことがあるかね

ユ。決して決して誰もその事を爭つたなどは他の所でも又法庭でも聞いたことがない。惡事をなしたものは(自分が訴へられた時には)この訴へをのがれんとして出來るだけのことをしたり、言つたりするが。

ソ。ユウチフロンよ、人々は彼等が惡事をなすを許し、そしてこれを知つてゐるにも拘らず、彼は何等の罰をも受ける必要はないと主張するかね。

ユ。そんなこと決してするものか。

ソ。それでは、彼等はあらゆる事をしたり又言つたりはしない。なんとなれば、思ふに、既に不正をなした時に彼は罰を受けずともよいと敢て言ひも爭もしないで、不正な事はしないと主張するのだ、そうじやないかね。

ユ。全くそうだ。

ソ。彼は惡事をなした者に罰が呈へられてはならぬと爭ふのではなくして、彼は確かに惡事をなしたものは誰か、どう言ふ事か、そして何時したかを問題にする。

ユ。全くそうだ。

ソ。そして、君の言ふ樣に正と不正について意見を闘はした時には神々も實に同じ事柄にあるのではないか。そして一方が彼は人に不正をなしたと言ひ、他方が之を否定するのでないか。そして明かに優れたるものよ、神も又人間も不正をなしたものは罰を受けなくともよいとは敢て言ひはしまい。

ユ。そうだ、此の點、ソクラテスよ。君は眞を語つてゐるよ、その重要な點では。

ソ。ユウチフロンよ、神々が爭ふものとすれば、神々も人間と同樣に問題になつてゐるその行爲について爭ふので、彼等が或る行爲について判斷を異にした時には一人のものはそれが正しくなされたと言ひ、他方は不正になされたと言ふのだ、そうじやないかね。

ユ。全くそうだ。

10

(9) ソ。さあ來た。親愛なるユウチフロンよ、私がより賢くなる爲に私に教へて呉れ。日傭人が殺人罪を犯した。そしてこの殺されたものゝ主人によつて縛られて、そしてこの捕縛の爲に縛つたものがこの男をどうすべきかを神托豫言者から聞く前に死んで了つたと言ふ樣な人は不正に殺されたんだと凡ての神々は考へてゐると言ひ、又この樣な人の爲に息子が自分の父に反對し殺人罪で訴へると言つたことが正しいと言ふ君の確かな證據は何にかね。さあ、

凡ての神々が此の樣な君の行爲を正しいと必ず考へる確かな證據を私に敎へて呉れ。君が私に充分に證明して呉れた時には、私は決して君の才智を讃めたゝへることに吝でない筈だ。ユ。それは生やさしい事じやない、ソクラテスよ。それでも君にそれを充分明かに示すことが出來るよ。

ソ。わかつた、君は私を裁判官よりも判りの惡いものと考へてゐるのだろう。君は彼等に此の行爲は不正であり、凡ての神々はそれを憎み給ふと言ふ事を明かに證明したんだろう。

ユ。お、ソクラテスよ、君が私の言をきいて呉れるなら充分明かにして見せるよ。

11

ソ。彼等が君は能辯だと思つたからきいたのだらう。然し君が話してゐる內に次の樣な事を私は考へて、自分に尋ねて見た。「若しユウチフロンが私に百度凡ての神々が此の樣な死を不正だと考へると敎へて呉れたとしても、一體何にをユウチフロンから敬虔とは何にか、不敬虔とはなにかについて多く敎へられたか。なんとなれば此の樣な行爲は思ふに、神の憎み給ふ所であるから。然しこの行爲によつては敬虔と不敬虔とを直に規定されるとは思へぬ、なんとなれば神の憎むものは又神の好む所と知られてゐるから。」だからユウチフロンよ、この問題は君に尋ねまい。凡ての神々はこの樣な行爲を不正と考へ、又凡ての神々は此の行爲を

憎み給ふとして置き給へ。然し今吾々は吾々の話の内で次の事を明かにしようじやないか、即ち凡ての神々の憎むものは不敬虔あり、好むものは敬虔である。そして一方では或る神々が憎み、他方では或る神々が好む所のものは共にそのどちらでもないと。君は敬虔と不敬虔についてこの様に定義しようとするんだね。

ユ。それで何んの妨げもないじやないか。ソクラテスよ。

ソ。私にはなんの妨げもないよ、ユウチフロン。然し君は自分の課題を知つて私に約束した事を此の様な假定から易すく教へ得るかどうかを考へ給へ。

ユ。私は言はん、凡ての神々が好むものは敬虔で、その反對に凡ての神々が憎む所のものは不敬虔だと。(一八)

ソ。さあ、吾々はこれを研究して見よう、ユウチフロンよ。今の言が正しいかどうか、或はそれを許すべきか否か、そして吾々自身にも他人にもそれ以上不滿をさしはさまず、即ち誰か一人が事情はこうだと主張すれば簡單に肯定したものか、或は吾々は人が言つたことを何にを言つたのかと研究しなければならぬかね。

ユ。そりや深く研究しなければならぬ。然し思ふに、今私の言つたことは正しいよ。

ソ。友よ、間もなく吾々はそれをよりよく知るだらう。次の事を考へて見給へ。敬虔はそれが故に神々に愛されるのか、或は愛されるが故に敬虔なのか。(10)

ユ。君の言ふことがわからんね、ソクラテス。

ソ。では私はもつとはつきりとさせる樣に努力しよう。吾々は動かされるものと動かすもの、導かれるものと導くもの、見られるものと見るものについて話してゐる。そして君も知つての通り、凡てこの樣なものはお互に異つてゐるし、又どう言ふ風に異つてゐるかも知つてゐる筈だ。

ユ。知つてゐると思ふが。

ソ。愛されるものがあつて、愛するものはこれと異つてはゐないかね。

ユ。そうなくてどうなるものか。

ソ。では言つて見給へ、動かされるものは動かされるから動かされるものであるのか、或は何にか他の爲でかね。

ユ。後の理由からではない。

ソ。導かれるものは導かれるからであり、見られるものは見られるからであらう。

ユ。そうだ。

ソ。見られるものがあるからして、これによつて見られるのではなくして、反つて反對に見られるからして見られるものがあるのだ。導かれるものがあるから、これによつて導かれるのでなく、反つて反對に導かれるから導かれるものがあり、動かされるものがあるから動かされるのでなく、反つて動かされるから動かされるものがあるのだ。[二九] 私の言はんとする所が君にわかるかね、ユウチフロンよ。私は次の如く言はんとするのである、即ち或るものが能動的に或るものに成る場合でも、或は受動的に或るものにされる場合でも、或る狀態にあるが故に成るのでなく、されるが故に成る狀態にあるのであり、される狀態にあるが故にされるのでなく、されるが故にされる狀態にあるのである、と。君はこれに同意しないか。

ユ。同意するさ。

ソ。愛されるものは能動的になる狀態か、受動的にされる狀態かじやないか。

ユ。全くそうだ。

ソ。そして、こゝでも前の場合と同じ事情だ。愛されてゐるものなるが故に愛するものから愛されるのでなく、愛されてゐるから愛されてゐるものなのである。

ユ。必然。

ソ。敬虔については吾々はなんと言つたものかね、ユウチフロンよ。君の言によれば凡ての

神々から愛されることであるんだね。

ユ。そうだ。

ソ。敬虔であるか、或は他の何等かの理由からかね。

ユ。その理由からだ。

ソ。では敬虔なるが故に愛されるのであつて、愛されるが故に敬虔なのではないのだね。

ユ。勿論そうだ。

ソ。然し、神々に愛されるからして、愛されるものであり、神のみ心に適えるものなのだね。

ユ。そうなくてどうなるものか。

ソ。と、君の言ふ様に、神のみ心に適ふことは敬虔ではなく、ユウチフロンよ、又敬虔も神のみ心に適ふことではなく、此等は互に異つてゐるのだ。

ユ。なんだつて、ソクラテスよ。

ソ。と言ふのは吾々は敬虔は敬虔なるが故に愛されるのであつて、愛されるが故に敬虔なのではないと意見を同じうしたからさ。そうだらう。

ユ。そうだ。

(二)ソクラテスとユウチフロンと共に敬虔の定義を見出さんとする努力(十一E—十五C)十

三章―十九章。

a。敬虔は神々へのテラペイヤと奉仕に關する正義の一部である。(十一E―十四B)十三章―十六章。

b。敬虔は供物と祈禱の智識である(十四B―十五C)十七章―十九章。

13

ソ。神のみ心に適ふと言ふことは、然乍、神々から愛されるが故に愛されると言ふその結果神のみ心に適ふのであつて、神のみ心に適ふが故にその爲に愛されるのではない。

ユ。君の言ふことは正しい。

ソ。では親愛なるユウチフロンよ。神のみ心に適ふことゝ敬虔とが同じだとすれば一方では若し敬虔は敬虔なるが故に愛されるのであれば神のみ心に適えるものは神のみ心に適えるものなるが故に愛されねばならぬし、他方、神々によつて愛されることによつて神のみ心に適へるものは神のみ心に適ふのであれば、敬虔は愛されることによつて敬虔でなければならぬ。然るに今や君はその兩者は兩立しない。そしてそれ故に全々兩者は區別されねばならぬことを知つた。前者卽ち神のみ心に適えるものは愛されるが故に愛されるが如きものであり、後者卽ち敬虔なものは愛されるが如きものなるが故に愛されるのだ。お、ユウチフロン

(11)

よ、君は敬虔とは何んぞやとの私の質問に私の欲してゐる様な、それの本質(ウシヤ)を明かにしてゐないで、敬虔の狀態(パトス)、即ち敬虔とは凡ての神々に愛される狀態だと言つてゐて、その本質を語つてゐない様に思へる。親切だつたら、再び初から敬虔の何んたるかを言つて呉れ。それが神々に愛される事であらうが、或は又他の狀態であらうがそれについては吾々は爭はないから。

進んで敬虔とは何にか、不敬虔とは何にかを言つて呉れないか。

ユ。ソクラテスよ、私は自分の考へてゐることをどう君に語つてよいかを知らぬ。なんとなれば吾々が定立したものは常に逃げ去つて、吾々の打建てた立場に留つてゐない様に思へるから。

ソ。君の言ふ所は吾々の祖先のダイダルスについてである様に思へる。若し私がこの事を言ひ又主張したとすれば君は次の様に確に嘲笑したであらう。即ち君はダイダロス(二〇)の同族なるが故に私の言葉の像(言論)は飛び廻つて彼等の置いた所には留つてゐないと。然し實に此等の議論は君の置いたものなのだから吾々は他の皮肉を言はねばならぬ。なんとなれば君自身も知つての通り、それを(言論)をしつかり保とうと欲しないのは外ならぬ君だからさ。

ユ。思ふに、ソクラテスよ、吾々の議論は今や此の様な皮肉を必要としてゐる。なんとなれば此の様に飛び廻り、同一場所に留らぬのは私じやなくつて反つて、思ふに、あのダイダロスなの

は君さ。[二二] 若し私にもとづいた議論なればそれは常に動揺しないから。[二三]

ソ。そうすると藝術の點では私はダイダロスよりも優れてゐる樣に思へる。即ちダイダロスはたゞ自分の作つたものしか動かさぬのに、私は自分のものと共に、御存じの樣に、他のものをも動かす點で。そしてまさに私の此の藝術に於て最も奇怪な事は私が自分の意志に反して偉大なる藝術家であることである。なんとなれば私は此の議論(ロゴス)に止つて、それを固く定める事の方をダイダロスの藝術(ソホス)とタンタロス[二三]の富とを共に獲ることよりもより一層望んでゐるから。然しこの事はこれで充分としておこう。なんとなれば君はあきてゐる樣に思へるから。今は敬虔について君が私に教へ得られる樣に君と努力して見よう。いやがつてはいけないよ。さあ凡ての敬虔は必ず正しいと思はなくともよいかどうかを考へて見給へ。[二四]

ユ。正しいさ。

ソ。そして又凡ての正しきものは敬虔であるか、或は一方凡ての敬虔は正であつて、他方正しきものは敬虔の凡てではなくつて、その一部が敬虔であり、そしてその他は他のものなのか。

(12)

ユ。ソクラテスよ、君の言に私は從はない。

ソ。君は實に私より若いんだから、私よりも賢い筈だが。然し私の言つた樣に君は賢過ぎるから活氣がないのだ。然し優れたるものよ、努力すれば私の言を理解するに困難はないよ。

私はかの詩人が作つた詩とは反對のことを考へてゐる。

然し萬物を作り、萬物を創造せるゼウスの神については君に語らうとしないであろう。なんとなれば懼ある所には又敬あるが故に。

私は此の詩人とは異つてゐる。どれだけ違ふか君に言はうか。

ユ。言つて呉れ。

ソ。「懼ある所には又敬あり」であるとは私には思へない、なんとなれば病氣とか貧棒とか多くその様なものを懼れる多くのものは此の様な悪を懼れはするが決して彼等の懼る所のものを敬ひはしないと私には考へられるから。君はどう考へるかね。

ユ。そう考へる。

ソ。反つて敬ある所には懼ありだ。なんとなれば或る行爲を恥じ悔いる時にその不正の風評に懼れぬものがあらうか。

ユ。そう思はれる。

ソ。「懼ある所には敬あり」と言ふのは正しき言ではなく、反つて「敬ある所には懼あり」である。然し懼ある所にはそこに常に敬ありと言へぬ。なんとなれば、思ふに、懼は敬よりもより廣いもので、敬は懼の一部である、恰も奇數は數の一部であるが如きである。數のある所に奇數あ

りとは言へぬ、然し奇數ある所には常に數がある。私の言に從ふだらうね。

ユ。そうとも。

ソ。さて、此と同じ意味で私は次の質問をしたさ。正義のある所に敬虔があるのか、又は敬虔のある所に正義があるのか、或は又正義のある所には全く敬虔はないのかと。なんとなれば敬虔は正義の一部であるからね。吾々はこう主張すべきか或は君には他の考へがあるのかね。

ユ。他に考へはない、君の意見は正しい様に思へる。

14

ソ。では次のことを考へて見よう、敬虔が正義の一部であるとすれば、吾々は、思ふに、敬虔は正義のどの様な部分であるかを檢討しなければならぬ。君が先に言つたこと、例へば偶數は數のどの様な種であり、又どの様な數が偶數であるかを尋ぬるなれば私は次の如く言ふであろう。不等邊のものでなくして二等邊のものだと。(二五) 君はそうは思はぬか。

ユ。そう思ふ。

ソ。さて敬虔は正義のどの部分であるかを研究し、私に教へて呉れ。そうすれば私はメレトスに「君は私に不正をしてはならぬし、又不敬虔で訴へてもならぬ、なんとなればユウチフロン

から既に崇敬(エウセベス)や敬虔や不敬虔な行爲のなんたるかを充分敎へ込まれたのであるから」と言ふ事が出來るから。

ユ。ソクラテスよ、崇敬、敬虔は諸神を世話(テラペイア)する正義の一部である。殘りの德の部分は人間の世話についてのものである。(二七)

15

ソ。お、ユウチフロンよ、君はうまく言つたと私には思へる。然しもう少し說明があればよいにと思ふ。私には世話をどう君が解してゐるかを尙充分に理解してゐない、なんとなれば、思ふに、君は他のものに對しての世話と神々に對する世話とを同じものとは言はないであろうから。なんとなれば吾々は良く言ふ所であるが、例へば凡てのものが馬を世話する事を知つてゐるのではなくして調馬師がそれを知つてゐるのだ、そうではないか。

ユ。全くそうだ。

ソ。思ふに、馬を世話する事が調馬師の術なのだ。

ユ。然り。

ソ。凡てのものが犬を世話することを知つてゐるのではなく獵師が知つてゐるのだ。

ユ。そうだ。

ソ。思ふに、獵師の術は犬を世話することにある。
ユ。そうとも。
ソ。牧者の術は牛を世話することである。
ユ。全くそうだ。
ソ。そして敬虔と崇敬とは、ユウチフロンよ、神々を世話することであると君は言ふんだね。
ユ。そう言ふのさ
ソ。凡ての世話は同一の目的に達するんではないかね。世話は世話されるものゝ善或は利益を目的としてゐる事が此れでわかる。實に君の見るが如くに馬は調馬師の術の世話によつてそれから利益を得、改良される、君はそう思はぬかね。
ユ。そう思ふ。
ソ。そして、思ふに、犬は獵師の術によつて、牛は牧者の術によつて善と改良とを得る。そして他の一切のものも同様だ。それとも君は世話は世話されるものに害を呈へるものと思ふかね。
ユ。神かけて、私はそう思はぬ。
ソ。そうでなくして利益のためなんだらう。

ユ。そうなくてどうなるものか。

ソ。神々を世話することゝしての敬虔は神々を利益し、神々を改良するのか、卽ち或る敬虔なる行爲を君が爲す度に神々の或るものをよりよくしてゐると言ふのに同意するか。

ソ。神かけて、それには同意しない。

ユ。ユウチフロンよ、君がこの樣に言つてゐるとは私は思はない。君の意味はこれとは遙に異つてゐるのだろう。この爲に私は一體君は神々への世話をどう解してゐるのかと尋ねたのだ、なんとなれば君がこれを意味してゐるとは考へなかつたから。

ユ。實に正しい事だ、ソクラテスよ、實に私は此の樣な事を意味してゐない。

ソ。よし來た。では敬虔はどの樣な神々への世話なのだ。

ユ。ソクラテスよ、奴隷がその主人を世話するそれさ。

ソ。わかつた。思ふにそれは神々への或る奉仕(ヒペレテケー)なんだ。(二八)

ユ。そうなんだ。

16

ソ。さて君は醫者達への奉仕(テラペイア)は如何なる目的になされるかを告げられるか。それは健康を目的としてゐるとは君は思はぬか。

ユ。そう思ふよ。

ソ。ではどうだ。造船工達への奉仕は何にかの作品(エルゴン)を成し就げんが爲に奉仕するんだろう。

ユ。明かに、ソクラテスよ、船を作る爲さ。

ソ。そして、建築士達への奉仕は、思ふに家を建てることだ。

ユ。然り。

ソ。では友よ、神々への奉仕はどう言ふ目的(エルゴン)を成し就げる爲の奉仕なのか言つて見た給へ。君がそれを知つてゐるのは私にはわかるのだ。なんとなればかつて君は神的な事柄(宗教)については他の人々よりも最も良く知つてゐると言つたんだからね。

ユ。そして私の言つたことに間違はないよ。ソクラテスよ。

ソ。では、ゼウスの神かけて、一體全體、神々が吾々を奉仕者として使用して造りあげたかの善美なる作品(エルゴン)は何にかね。

ユ。それは美しきものであり、數多いよ。ソクラテスよ。

(14)

ソ。將軍のなした事も數多い、友よ、然しその内で重要な事柄は戰爭に勝利を獲ると言ふことであると直ぐ言ひ得る。そうじやないか。

ユ。そうでなくてどうなるものか。

ソ。そして農夫も、思ふに、多くの善なる事を成し就げるが然しそれにも拘らずその内の重要な事柄は土地から食物を獲ることである。

ユ。全くそうだ。

ソ。ではどうだ、神々が成し就げた多くの美しいものは、そしてそれ等の作品（エルゴン）の重要なものは何にか。

ユ。ソクラテスよ、一寸前に此等のものがどう言ふ有様であるかを充分知ろうとするのは困難なことだと私は言つたのだ。が、然し私は君に簡單に言はう、若し人が祈禱と供物に於て神神に嬉ばれる言葉や行動を知ればそれが敬虔な行爲であり、そして此の行爲が一家を保ち、一國の公安を維持するのである。此の様な神々に嬉ばれる行爲に反對の行爲が不敬虔であつて、此れが凡てのものを滅し亡すのである。

17

ソ。お、ユウチフロンよ。君がしようと思へば私の尋ねてゐるかの作品（エルゴン）の重要なものにもつと簡單に答へられたのであろう。然るに君は私に教へようとは考へてゐないのだ。このことはつきりしてゐる。なんとなれば、問題の核心に達した時に君は問題の方向を轉じて了つたからである。君が私の問に答へてさへ呉れたなれば君からして敬虔の本質を既に充分

學び得た事であろうに。さて乍然、問ふものは問はれるものに導かれるどこへでも從はねばならぬものなのだから、再び敬虔とは、そして敬虔の本質は如何と尋ねよう。それは如何にして人は供物を捧げ祈禱するかの智識ではなかつたか。

ユ。そうだ。

ソ。さて、供物を捧げる事は神々に何物かを贈ることであり、そして祈禱とは、神々に何事かを願ふことではないか。

ユ。全くそうだ。ソクラテスよ。

ソ。ではこの定義からすれば敬虔の本質は神々への贈與と願望についての智識なのだ。

ユ。全く上手に、おソクラテスよ、君は私の言を理解した。

ソ。友よ、私は實に君の智慧の愛人なのだ。それ故に君の言はんとする一つでも地上に落さぬ様に注意をしてゐるのだ。だからもう一度言つて呉れ、神々への此の奉仕とは如何なるものかを。君はそれを神々に願ふこと、神々に贈る事であると言うんだね。

ユ。そうだ。

18

ソ。所で吾々が必要としてゐるものそのものを願ふのが本當の願ひなのではないか。

ユ。他の何にものを願ふものか。

ソ。そして他方神々が吾々に求むものを返務として與へるのが眞の贈與なのだろう。なんとなれば、思ふに、他に何物かを與へる時に彼の決して求めないものを贈ると言ふのはその方法ではないから。

ユ。君は正しいことを言ふ、ソクラテスよ。

ソ。ではユウチフロンよ、敬虔の本質は神々と人間との取引の學(エンポリケー)なんだ。(三〇)

ユ。取引の學と言つてもよい、若し君がそれをそう呼ぶのが好きなら。

ソ。若しそれが眞理に叶はずば何物も私は好まない。然し私に言つて呉れ。吾々から受ける贈與によつて神々はどんな利益を受けるのか。又一方神々が吾々に下されるものは善なるものなる事は凡ての人に明かである。なんとなれば吾々は神々から與へられない善を全々もつてゐないから。他方神々は吾々から如何なる利益を得るか。この取引では吾々が神々よりも利益してゐるのではないか、吾々は凡ての善なるものを神々から獲てゐるのに彼等は吾々から何にものをも獲てゐないから。

(15)

ユ。ソクラテスよ、君は神々が吾々より獲たるものから利益を增すものと考へるかね。

ソ。ユウチフロンよ、では吾々が神々に贈るものは一體どんなものか。

ユ。稱讃と尊敬とそして先に私の言へるが如く神々の氣に入ると言ふ事の外に何にかあると君は考へるか。

ソ。では神々を嬉ばすこと(ケカリスモノン)が敬虔であつて神々を利し、神々を愛することではないのだね。

ユ。私は神々にそれが最も氣に入ることだと思ふ。

ソ。では思ふに、敬虔とは神々に氣に入ることだと再び言ふんだね。

ユ。そうだ。

19

ソ。この様な説明によつてもし君の議論は確立せずして變轉してゐることが君自身に明かになつた時に君は驚くよ。君は私を議論をよく變轉せしめるダイダロスであると言はんとしてゐるが、然し君自身はダイダロスよりも遙かに優れたる藝術家であつて、議論を循環せしめて又同じ所に歸つて來たではないか。なんとなれば思ふに、君は以前に敬虔と神々に愛されることとは同一でなくて反つてそれは異つたものだと吾々に思はれると言つたことを思ひ起すだらう。思ひ出さぬかね。

ユ。思ひ出すよ。

ソ。然るに今や君は神々に嬉ばれることが敬虔だと思つてゐるのではないか。所がそれは

神神に愛されることゝ異つたものではない、そうだらう。

ユ。そうだ。

ソ。それで以前の結論が間違つてゐるのか或はそれが間違つてゐなければ、今のが正しく主張されてゐないかだ。

ユ。そうなるな。

C　結論。ソクラテスは敬虔の定義は未だ見付からぬ故、初から研究しようとするがユウチフロンは時間がないと言つて物別れになる(十五C—十六A)二十章

20

ソ。そこで吾々は再び初から敬虔とは何かを研究しなければならぬ。なんとなれば私はそれを學び知る迄は自發的にはそれから手を引きはしないから。それ故に君は私を輕視することなく、出來るだけ心を引き締めて眞理を私に語つて呉れ。なんとなればこの眞理を此の世で知つてゐるものがあるとすれば、それは君なのだから。それ故に君がそれを語る迄はプロテウスの樣に君を解放しはしない。なんとなれば若し君が敬虔とか不敬虔とについて充分に知つてゐなければ君は如何なる場合にも日傭人のために君の老いたる父を殺人罪で告訴することはなく、反つて君は神々を恐れて、不正なる行爲をしなかつたであろうし又人々に

恥じなくともよかつたのだ。故に私は君が敬虔と不敬虔とをよく知つてゐるものと固く信じてゐるのだ。さあ、善良なるユウチフロンよ、言つて呉れ。そして君のそれについて考へてゐる所を隠さずにくれ。

ユ。だが、他の機會にね、ソクラテスよ、今や何んとなれば、私は他處へ急ぐんだ、もう行く時間なのだ。

ソ。嗚呼。殘念至極な、友よ、私は君から敬虔と不敬虔とを學んで、そしてメレトスの訴訟を、彼(16)に私は既にユウチフロンから神的な事柄(宗教に)ついて智識を立て、そして無智からの我儘な行爲はせず、又新しい宗教をも開きもしないことを立證してのがれようとし、然り而して餘生を有爲に送らんとする大なる希望をうちこはして君は去らうとするのか。(三一)

終

(一) δίκη は Causa privata γραφή は Causa publica である。殺人、不敬虔は國家の安寧秩序に關するをもつて後者に屬して而してアテンでは後者の審議は公開、訴の提起は文書をもつてする。

(二) 5A. 15E. Apol. 23E. Theaet. 210D.

(三) Gorg. 521D. 527DE.

(四) Theaet. 151A, stäat 496C, Euthyd. 272E, phaidr. 242B, Apol. 27B—E, 31CD, 40AB, Alc. I. 103A.

(五) ソクラテスは教師ではなく自から探求者と稱するを常とする。

Apol. 33A, Lach. 186BC, Staat 338B.

Xeno, Mem. I, 2, 3.

(六) Geteß 876B, 766D にてはかゝる事を拒絶する。

(七) Laches 195 DE.

(八) アテネの法律に依れば市民は親類 μέχρις ἀνεψιαδῶν の誰か又は家族 οἰκέτης の誰かゞ殺された時には起訴者とされ又起訴の義務を法律上にも宗教上にも市民に負したが、ニウチフロンの懺悔は法律に規定ない。尙日本刑法一〇五條刑事訴訟法一八六條一項二五九條二七〇條參照。

(九) Gorg. 480C—D.

(一〇) Hipp. Maj. 286D.

(一一) 第一定義なり。

(一二) Staat 378B.

(一三) Theaet. 176B (staat 377—378ff).

(一四) τῶν ἀγαθῶν を皮肉の意味に解す。

(一五) αὐτὸ τὸ εἶδος.

(一六) μιᾳ διδέᾳ. Man. 72C. 拙稿プラトン[メノン]篇研究(哲學第十七輯)三十三頁。

(一七) 第二定義 (6E—7A) ἔστι τοίνυν τὸ μὲν τοῖς θεοῖς προσφιλὲς ὅσιον, τὸ δὲ μὴ προσφιλὲς ἀνόσιον.

(一八) 第三定義 τοῦτο εἶναι τὸ ὅσιον ὃ ἂν πάντες οἱ θεοὶ φιλῶσιν, καὶ τὸ ἐναντίον, ὃ ἂν πάντες θεοὶ μισῶσιν, ἀνόσιον.

(一九) The difference between the meaning of φέρεται and φερόμενόν ἐστι is not easy to see. The former may mean to affirm the beginning of an action, the latter the continuance; but in this case the inference wou-

ld not necessarily follow.

(二〇) Meno. 97D. 神話的人物アテナイ人ともクレタ人とも言はれてゐる醫術家。神話解說中に詳し。

(二一) Meno. 80A.

(二二) Meno. 97DE, 98A. 拙稿メノン篇大十三頁大十九頁註(四)

(二三) ゼウスの子にしてミノスとラダマンテスの父非常に有福な王でありてリテア王ともアルゴスの王ともコリントの王とも言はれてゐる。

(二四) 此の樣に途中からソクラテスの導く方法については Theae. 197A, 206C, Gorg. 462D, 489E, Hipp. Maj. 293D. meno. 77D, 74B.

(二五) ギリシャでは數學の關係を幾何學的圖形で說明してゐる例が多い。

(二六) 第四定義。

(二七) die Behandlung (Schlei.) Ministration (Grote) Attention (Jowett.)

(二八) ἡ ὑπηρετικὴ. Ministration (Jowett), Dienst (Schlei.)

(二九) 第五定義。

(三〇) Do ut des. Staat 290CD, Alc. I. 148 E. Aristotel. Sophist. Elench. p. 183, 6. 7.

ἐπεὶ καὶ διὰ τοῦτο Σωκράτης ἠρώτα καὶ οὐκ ἀπεκρίνετο: ὡμολόγει γὰρ οὐκ εἰδέναι.

Text. J. Burnet. Platonis Opera I. Oxford 1905. Ubersetzungen,

B. Jowett, F, Schleiermacher, Schneider. Zur Erläuterung.

Bonitz, H. Platonische Studien. 3 aufl. Berlin. 1886. Lutoslawski, W. Platos Logic. London. 1905.

Grote, Plato. Vol. I. London 1888. Ritter, C., Platon Bd. I München 1910. Natorp, p., Platons Ideenlehre. Leip. 1903. Reader, Platons philosophische Entwicklung. Leip. 1905.

Shorey, P., What Plato said. chicago. 1934.